

Kaleidoscope

Vol.8

“エイリアンズ”



くろがね ゆう

イラスト：明日 蘭

先行ロードショー

「もう、エイリアン2見た?」

映画が公開されてから1カ月くらいの間、友達と会うとあいさつがわりにそんな言葉を交わすほど、エイリアン2には実際シビれた。

見たのは先行ロードショーという特別興業で、一般公開より2週間ばかり早かった。あまり宣伝もしないし、夜9時くらいまで通常プログラムを上映した後オールナイトで行うので、超話題作も楽に座って(しかも早く並べば一般料金で指定席に座って)見ることができる。ボクは「バック・トゥ・ザ・フューチャー」も、この先行ロードショーで一般公開の1週間前に、指定席に座って1,500円で見た!

話がそれたが、要するにボクは「エイリアン2」もオールナイトの先行ロード

ショーなら、いい席に座って見れると思ったのだ。

おもしろいとの噂が高いにしても、1時間前に劇場に行けば、まちがいなく座れるはずだった。

ところが、1時間前に着いたにも関わらず、劇場にはすでに長蛇の列。10階の劇場から9階の非常階段を埋め尽くし、8階に達しようとしていた。

35mm vs 70mm

男性の係員が行列を整理し、「9階の劇場でも特別上映いたします。70mmではなく35mmですが、こちらでしたら座ってご覧になれます」と、ハンド・マイクで案内していたが、移るものはひとりもいなかった。

確かに35mmも上下をマスクして横長のワイド・スクリーンにできる。しかし、4倍近い面積比を持つ70mmの画質の良さにかなうとは思えない。画質のクォリティを同じに保とうとしたら、上映スクリーンのサイズ比率も1/4にしなければならないだろう。

それに、もし35mmが光学録音で、70mmが磁気録音なら、同じドルビー・ステレオで効果に変わりはなくとも、その音質において差が出るとも考えられるし……。

プログラムによると撮影はパナビジョ

ンになっている。これはパナビジョン社の機材を使ったら表示しなければいけないらしいから、35mmか70mm撮影かはわからない。

オリジナル撮影は35mmで、上映フィルムをプリントするときには70mmに拡大しブロー・アップしているとすれば、70mmは単に上映スクリーンを大きくとれて、音質がいいかもしれないという2つの利点しかないことになる。画質は拡大されて荒れるだろうし、ドルビー・ステレオなら70mmの6本(4本)の磁気式サウンド・トラックを使用する必要もなく、光学式サウンド・トラック2本で十分。ちっとも70mmのメリットがないように思える。

それでもボクはアスペクト比1:2.2のワイドな、超大画面の70mmを選んだ。ほかのほとんどの人もそうだった。やはり大きな画面は、家庭では味わえない劇場ならではのメリットだ。

後で35mmからの拡大とわかったが、ボクには画面がきれいだと思えし、音質も(その劇場がアルテックのボイス・オブ・シアターだからか)非常に良かったと思う。

結局、1,000席以上もある広い劇場でも座ることができず、立ったまま最後まで見ることになった。それでも入場はできし、一番後ろで立って見たものの、超大画面のおかげで映画にのめり込むことができたので、とりあえず70mmを選んで正解だったような気はする。

ベスト・ムービー

だいたいの場合、面白い映画というのは、少々矛盾やミスを感じさせないで一気に最後まで楽しませてくれる。



あれ、マガジン・チェンジしないでピストルを20発以上撃っているぞ、なんてその場で思ってしまうような映画は、たいてい駄作であることが多い。ストーリーや演出効果などいろんなものがひとつにまとまって、映画全体を盛り上げているときは、見るほうも(きっと物陰を走り抜けたときにマガジン・チェンジしたにちがいない)なんて好意的に解釈してしまったりする。

そういう意味では、「エイリアン2」はボクにとって完璧に近い。年末に残っている「トップ・ガン」を見てからでなければ1位は決められないかもしれないが、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」を去年の作品として、間違いなくボクのベスト



マリンコーが作る
 1917年作のシムコ
 真下に落ちるまで
 今でも作業者のボイス
 に愛用者が多い



ズラズ
 マリンコーの
 サイドアームにノーマル
 のVP-70が使われている
 スクリンマフラーは
 初めではまだ
 とでも使われていた
 している



マリンコーマンの
 マーケットで長が
 ショットガンに変わって
 39の7スライドカスタム
 クラフはバル



エアリス
 面白さもさることながら
 面白すぎるGunの数も
 楽しかったです

迫りに満ちたドルビー・ステレオは、絶妙にサウンド・デザインされ、見ているものを完全に飲み込んでしまうほど。

スマート・ガンやM41A / 10mmパルス・ライフルと名付けられたプロップ・ガンの、頼もしくも恐ろしい発射音とその反響音。

リプリーがAPC(装甲兵員輸送車)を自分で操縦して仲間を救出しに向かうとき、サラウンド・スピーカーからも一斉に音楽が流れ、思わずヤッターと叫びたくなるようなうまい盛り上げ方。

着陸船が墜落して爆発、散乱するときのリアルな立体音。鉄パイプのようなものが、目の前まで転がってくるように聞こえてハッと息を飲んだのを今でもハッキリ覚えている。

最近の映画の傾向として、優れたストーリー、優れたSFX、優れたスタッフなどは当然として、美しい映像とリアルな音響とが一体化してきているような気がする。特に遅れていた音響は、ドルビー・ステレオによってようやく鑑賞に堪えるレベルまで改善された。

しかし再生周波数レンジなど、いまだに光学式では100~7,000Hzだ! これでは20,000Hzまで聞こえる人間の耳の特性に対して、あまりにも高域が貧弱じゃないか。今どきプロ・レベルで光学式録音を使っているのは映画くらいしか見当たらない。早くすべての映画音声を磁気式レベルにすべきだと思うのだが。

また話がそれた。とにかく、ノイズ・リダクションを含む4チャンネル立体音響、ドルビー・ステレオは、劇場の音を、光学式であってもHi-Fi 寄りにした。

AVの時代

しかし重要なことは、それが IN SELECTED THEATERS (映画のクレジット表記より) になっていることだ。つまり、少なくとも音響に関しては、それなりの設備がなければ準 Hi-Fi サウンド、4チャンネル立体音響は再生できないのだ。

そして、光学式再生を中心に設計された劇場では、高音が初めから出ない再生装置しかない可能性もあり、そこで磁気録音を再生しても、とても Hi-Fi サウンドなど望めないということになる。

というわけで、ここにきてにわかになら注目されだしたのが、家庭のオーディオ・ビデオ機器。サラウンド・プロセッサーを使

えば、ドルビー・ステレオ (サラウンド) 再生も可能で、場末の劇場などかなわない Hi-Fi サウンドが楽しめてしまうのだ。

画面サイズこそかなわないものの、音響では優位になりつつある家庭のシステム。劇場もそのへんを考慮に入れないと、また客足が遠退くことになるかもしれない。

もう紙数も尽きた。いずれまた AV のことを詳しく書いてみたいと思う。しめくくりには、「エイリアン 2」でシガニー・ウィーバーの出演料が 100 万ドル (1986 年のレートで約 1 億 5 千 5 百万円) だったことを付け加えておこう。